

作業療法学生の資格試験受験数と授業外学習時間および主体的授業態度の関連

竹村 篤*1 井村 亘*1*2

要旨:本研究は、作業療法学生の主体的な学習の向上に資する知見を得ることをねらいとして、作業療法学生を対象に資格試験受験数と授業外学習時間および主体的授業態度の関連について明らかにすることを目的とした。対象は作業療法に関連する様々な資格取得支援を行っている岡山県 A 専門学校（以下、A 校）作業療法学科に在籍する 3 年生および 4 年生の 49 名とし、アンケート調査を実施した。調査項目は、学年、資格試験受験数、授業外学習時間、主体的授業態度で構成した。統計解析は、独立変数を資格試験受験数、従属変数を授業外学習時間および主体的授業態度としてそれぞれ単回帰分析を実施した。結果、資格試験受験数と授業外学習時間（寄与率=0.08, $p < 0.05$ ）および主体的授業態度（寄与率=0.13, $p < 0.05$ ）ともに有意な関連が認められた。本研究結果は、資格試験受験数を高めることは作業療法学生の主体的な学習の向上に繋がる可能性を示すものである。

キーワード: 作業療法学生、主体的な学習、資格試験受験数

はじめに

第 1 回理学療法士・作業療法士学校養成施設カリキュラム等改善検討会の資料にある実態調査の結果¹⁾によると、作業療法士養成教育の現状として、少子化や作業療法士養成校の増加などを背景に、約 60%の作業療法士養成校が定員割れとなっており、常態化している。その結果、入学生の退学率も高く、一般大学の退学率が約 10%²⁾に対して、作業療法士養成校の退学率は 17.5%¹⁾、最も多い退学理由は留年となっている。留年の原因として 57.6%が臨床実習以外の科目試験の単位未修に伴う留年¹⁾であり、日々の授業への取り組み姿勢や、授業外の予習・復習などの主体的な学習が不十分であることが推察される。

主体的な学習に関して、大学審議会答申³⁾や中央教育審議会答申⁴⁾において、海外に比べて日本の大学生の授業外学習時間が少ないことが繰り返し指摘されている。これらの指摘を受け、主体的な学習時間を確保するため、授業方法の工夫、授業内小テストの実施、ギャップ制や Grade Point Average（以下、GPA）などの様々な取り組みが日本全国の大学に広がっている⁵⁾が、これらの諸施策と主体的な学習の関連が十分に理解されていない実態も指摘されている⁴⁾。

一方で主体的な学習について畑野ら⁶⁾は、学習を時間という量的な側面だけでなく、授業態度という質的な側面に区別し、両方の側面からサポートする方策を検討する必要があると述べており、単位や卒業のためだけでなく、自らの成長のために授業や授業で出される習と授業外学習時間の関連について報告している。以上のことから、主体的な学習を述べる

*1 玉野総合医療専門学校 作業療法学科

*2 川崎医療福祉大学 医療技術学研究所 健康科学専攻 博士後期課程

(〒701-0193 岡山県倉敷市松島 288)

課題に主体的に取り組もうとする学習態度を「主体的な授業態度」と概念化し、主体的な学上では、授業外学習時間と主体的授業態度に着目する必要があると考えられる。

授業外学習時間と主体的授業態度について、教員資格など一つの資格を希望する大学生を対象とした調査^{7,8)}において、資格試験の受験と授業外学習時間および主体的授業態度の関連が明らかにされている。資格取得を目標とする学習は、授業外学習および主体的授業態度を向上させることから、資格試験の受験は、主体的な学習に影響を与える要因のひとつであると推察される。資格取得の意義として辻ら⁹⁾は、知識の獲得、継続的な学習姿勢やモチベーションの強化、能力証明の獲得、就職や待遇面での優遇、全般的な満足感の増加、資格関係の職業の選択を挙げている。資格取得のための学習について櫻井¹⁰⁾は、目的・手段の観点からは外発的動機づけとなるが、学生が自主的に学習に取り組んでいる自律・他律の観点では、内発的動機づけとなり、動機づけを段階的に捉える自己決定理論が定着していると述べている。つまり、学生自身が資格取得の意義を感じ、資格取得を主体的に選択し、そのための学習に積極的に取り組む状態は、行動に対する自己決定性の高さが内発的動機づけを高め、パフォーマンスに影響を及ぼすと推察できる。

しかし、先行研究^{7,8)}において資格試験の受験の有無と授業外学習時間と主体的授業態度についての報告はあるが、上記のとおり自律・他律の観点から考えると、学生が積極的に複数の資格取得を選択し、そのための学習に積極的に取り組む場合は、さらに内発的動機づけを高め、主体的な学習に影響を及ぼすと仮説を立てることができる。

そこで本研究では、作業療法学生の主体的な学習の向上に資する知見を得ることをねらいとして、作業療法学生を対象に資格試験受験数と授業外学習時間および主体的授業態度の関連について明らかにすることを目的として調査を実施した。

なお、本研究では主体的な学習について、量と質から捉えるため、授業外学習時間および主体的授業態度を主体的な学習として扱うこととした。

研究方法

1. 研究デザイン

本研究は、無記名自記式の集合調査とした。

2. 仮説モデル

仮説モデルは、行動に対する自己決定性の高さがパフォーマンスに影響を及ぼすというEdward L. D.ら¹¹⁾の自己決定理論を参考にして、資格試験受験数が主体的な学習として授業外学習時間と主体的授業態度に影響を与えるモデルを設定した。

3. 対象

対象は、A校作業療法学科に在籍する学生とした。A校作業療法学科は、2020年度入学生より保育士、福祉住環境コーディネーター2級、認知症ライフパートナー2級など作業療法に関連する様々な資格試験が、学生の任意で受験可能な4年制の専門学校である。なお本研究では、資格試験受験数が及ぼす影響を検討するため、資格試験の受験機会が多い3年生、4年生を対象学年とした。

4. 調査実施期間および調査内容

調査は、日常的な状態での学習の状況を検討するために、定期試験や資格試験の期間外である2023年6月～7月に実施した。調査内容は、学年、資格試験の受験数、主体的な学習の状況として、授業外学習時間および主体的授業態度で構成した。

1) 資格試験受験数

資格試験の受験数については、A校作業療法学科において資格取得支援を行っている保育士、福祉住環境コーディネーター2級、JADECC認知症ライフパートナー2級および3級、AEAJアロマセラピー検定1級、認定メイクケアセラピスト、認定メイクセラピーガイドについては選択式とし、漢字検定などの自主的に取得した資格については資格試験の受験数を記載するよう設定した。

2) 授業外学習時間

授業外学習時間については、典型的な1週間の予習や復習、宿題、課題などの授業に関する学習時間を、平日と土曜・休日に分けて記載するよう設定し、平日と土曜・休日の学習時間を足した時間を授業外学習時間とした。なお、典型的な1週間とは、定期試験前および資格試験前や旅行などのイベントのない日曜日から土曜日と教示するとともに質問票にも明記した。

3) 主体的授業態度

主体的な授業態度を測定するために、畑野⁶⁾によるACA尺度を用いた。この尺度は「課されたレポートや課題を少しでも良いものに仕上げようと努力する」「単位さえもらえればよいという気持ちで授業に出る」「プレゼンテーションの際、何を質問されても大丈夫なように十分に調べる」といった課題や授業に対する主体的な授業態度を表す9項目で構成されている。各項目は「強くそう思う」に5点、「そう思う」に4点、「どちらでもない」に3点、「あまりそう思わない」に2点、「そう思わない」に1点を付与し、主体的な授業態度が良いほど得点が高くなるように得点化（最高：45点、最少：9点）されている。なお4項目は逆転項目として捉えて、逆転処理した上で得点化した。

5. 統計解析

統計解析は、独立変数を資格試験受験数、従属変数を授業外学習時間および主体的な授業態度としてそれぞれ単回帰分析を実施した。統計処理ソフトはHAD15.0を使用した。有意水準は両側検定にて5%未満とした。

6. 倫理的配慮

調査対象には研究目的、内容、手順、利益、不利益、匿名性について紙面および口頭にて説明し、調査協力を求めた。特に、参加および中止は自由であり、参加の拒否や、同意後の中止等による教育上の不利益は一切ないこと強調して説明した。また結果公表に際しての匿名性と研究で得たデータは研究の目的以外で使用せず、データはインターネットに接続された環境では取り扱わないことも説明した。

なお、本研究計画は玉野総合医療専門学校の承認（研究計画番号：2023003）を得て実施した。

結果

1. 対象者の属性分布

A校作業療法学科に在籍する3年生および4年生50名を対象に調査を実施し、50名から回答を得た（回収率100%）。その内、無記入の項目が1項目でもあった記入ミスของデータは、分析から削除した。最終的な有効回答数は49名（3年生：23名、4年生26名）であり、有効回答率は98%であった。

2. 回答者の資格試験受験数

回答者の資格試験受験数の中央値（四分位範囲）は4種（3～5種）であった。

3. 資格試験受験数と授業外学習時間の関連

回答者の授業外学習時間の中央値（四分位範囲）は2.5時間（1～4.5時間）であった。資格試験受験数と授業外学習時間には有意な関連が認められ、回帰式は $y=0.5057x+1.4175$ であった（寄与率=0.08, $p<0.05$, 図1）。

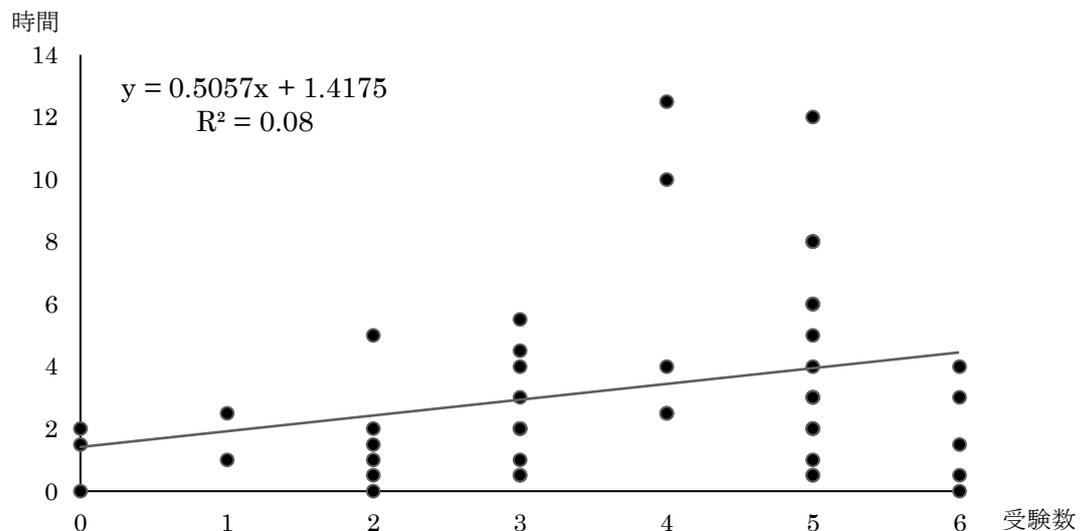


図1 資格試験受験数と授業外学習時間の関連

4. 資格試験受験数と主体的授業態度の関連

回答者の主体的授業態度の中央値（四分位範囲）は33点（30～36点）であった。資格試験受験数と主体的授業態度には有意な関連が認められ、回帰式は $y=1.1531x+28.731$ であった（寄与率=0.13, $p<0.05$, 図2）。

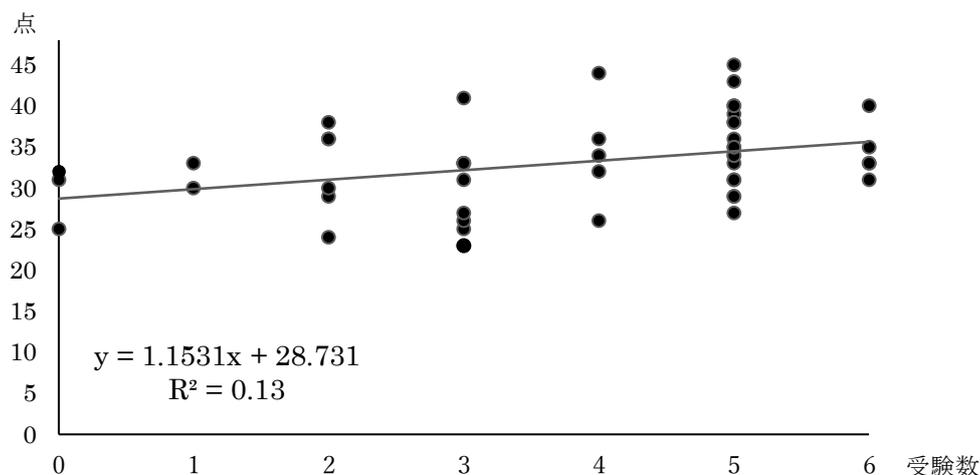


図2 資格試験受験数と主体的授業態度の関連

考察

本研究は、作業療法学生の主体的な学習の向上に資する知見を得ることをねらいとして、作業療法学生を対象に、資格試験受験数と授業外学習時間および主体的授業態度の関連について検討した。その結果、作業療法学生の資格試験受験数と授業外学習時間および主体的授業態度は統計学的に有意な関連が認められた。本研究結果は、作業療法学生の主体的な学習の向上に向けた支援方法を考える際に、複数の資格試験の受験を促すことの必要性を示している。

資格取得の意義やこれまでの先行研究^{7) 8)}において、資格試験の受験自体が、授業外学習時間と主体的授業態度に影響を及ぼすことが報告されていることから、資格試験の受験数に注目した本研究の結果は、先行研究を支持するものであり、妥当な結果であると判断できる。辻ら⁹⁾は、人には学習への動機づけが存在し、その質や程度によって、学習のプロセスや学習成果は大きく異なると述べており、資格取得の意義である「継続的な学習姿勢やモチベーションの強化」からも、資格試験の受験数が多い学生は、学習に対する内発的動機づけが高いと推察できる。この内発的動機づけにおいて自己決定理論では、学習者の内発的動機づけが高まる前提条件として、「自律性の欲求」、「有能性の欲求」、「関係性の欲求」の3欲求の充足が挙げられている¹¹⁾。これらの諸欲求を複数の資格試験の受験に捉え直すと、A校の作業療法に関連する資格の受験は、学生の任意であることから、「自律性の欲求」は、学習者が自律的に複数の資格取得を目指し学習に取り組みたいと感じることなどと考えられる。「有能性の欲求」は、学習者が複数の資格を取得することで能力を証明したい、取得した資格を今後のキャリアに活かしたいと感じることなどと考えられる。また、「関係性の欲求」は、学習者が仲間や教員と互いに協力し、複数の資格取得のための学習に取り組みたいと感じることなどと考えられ、複数の資格試験の受験は、これら3欲求を高める要因に成りうるかと推察できる。また、自己決定理論の調整段階¹²⁾に置き換えると、学習者は複数の資格試験の受験をすることが自分にとって価値があることを認識し、資格試験の受験に

積極的に取り組む「同一化的調整」の段階、また、資格試験の受験をすることが自分の価値観と一致し、違和感なく資格試験の受験に取り組む「統合的調整」の段階にある学生の比率が多いと考えられる。よって、複数の資格試験を自律的に受験することは、内発的動機付けを高め、主体的な学習に影響を与える要因の一つとなったと推察できる。

しかし、本分析モデルの授業外学習時間に対する寄与率は8%、主体的授業態度に対する寄与率は13%で決して高いとは言えない。主体的な学習を促す方法として澤田¹³⁾は、主体的な学習に対する内発的動機づけは、学生が自ら引き起こすことは一般的ではなく、教員による授業の構成要素や教育方法、学生との相互作用等の工夫が学生の学習に対する有意義感や受講満足度を高め、それが自発的な意欲を生み出すと述べている。また、道上ら¹⁴⁾は、本質的問題は教授学習過程にあり、キャップ制やGPAなどの諸手法の導入だけでなく個々の科目の授業設計や授業内外のバランスのとれた学習の工夫などが必要と述べている。つまり、主体的な学習を促す方策には、何らかの単独手法の導入で終わらず、学生の自発的な意欲を引き出す為に、多角的かつ総合的な取り組みが必要と考えられる。

最後に本研究の限界と今後の課題について述べる。本研究は横断研究であり、因果関係を明確にするまでは至っていない。そのため今後、縦断的調査研究などの研究デザインを用いた更なる検討が必要である。また、本研究の対象者は4年制専門学校作業療法学科1校に在籍する学生である。そのため本研究で得られた結果を一般化するためには、研究対象者を大学も含めた複数の作業療法養成校に在籍する学生とすることが必要である。

結論

本研究は、作業療法学生の主体的な学習の向上に資する知見を得ることをねらいとして、作業療法学生を対象に資格試験受験数と授業外学習時間および主体的授業態度の関連について明らかにすることを目的に調査を実施した。その結果、資格試験受験数は授業外学習時間および主体的授業態度ともに有意な関連が認められた。本研究結果は、作業療法学生の主体的な学習の向上に向けた支援方法の有益な資料になると考える。つまり、本研究結果は、作業療法学生の主体的な学習の向上に向けた支援方法の一つとして、複数の資格試験の受験に着目する必要性を示唆している。

謝辞

稿を終えるにあたり、本調査研究に快く協力して下さった学生の皆様に深く感謝いたします。

なお、本研究に関して開示すべきCOI状態はありません。

文献

- 1) 厚生労働省：第1回理学療法士作業療法士学校養成施設カリキュラム等改善検討会資料5。厚生労働省ホームページ、(オンライン)、<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000168990.pdf> (参照 2023-4-18-10 : 15)

- 2) 文部科学省：学生の中途退学や休学等の状況について. 文部科学省報道発表, (オンライン),
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/_icsFiles/afieldfile/2014/10/08/1352425_01.pdf
(参照 2023-4-20-12 : 30)
- 3) 大学審議会：21 世紀の大学像と今後の改革方策について (答申). 1998
- 4) 中央教育審議会：学士課程教育の構築に向けて (答申). 2008
- 5) 野田文香, 渋井進：「単位制度の実質化」と大学機構別認証評価. 大学評価・単位研究第 17 号 : 20-33, 2016
- 6) 畑野快, 溝上慎一：大学生の主體的な学習態度と学習時間に基づく学生タイプの検討. 日本教育工学会論文誌 37 : 13-21, 2013
- 7) 迫田孝志, 森藤悦子：家庭学習に関する調査研究Ⅱ大学生への調査を通じて. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 24 : 213-218, 2015
- 8) 寺島幸生：教員志望の大学院生の大学教育観と学修態度-学部学生との比較から-. 鳴門教育大学研究紀要第 36 巻 : 70-76, 2021
- 9) 辻慶太, 芳鐘冬樹：司書資格と図書館に関する知識・モチベーションの関係. 図書館情報メディア研究第 8 巻 1 号 : 1-12, 2010
- 10) 櫻井茂男：自ら学ぶ意欲の心理学 (東京：有斐閣, 2009)
- 11) Edward L. D, Ryan. R.M : Intrinsic motivation and self-determination in human behavior. New York : Plenum. 1985.
- 12) 中谷素之：教育心理学-動機づけ 情意のはたらき-鹿毛雅治編 (東京：朝倉出版, 2006)
- 13) 澤田忠幸：多元的な“学生による授業評価”活用の有効性. 大学教育学会誌 31 : 132-139, 2009
- 14) 溝上慎一, 中間玲子：学習タイプ (授業・授業外学習) による知識・技能の獲得差違. 大学教育学会誌 31 (1) : 112-119, 2009